

(行發日五十回一月每) 可認物便郵種三第日三月三年三十正大
行 發 日 五 十 月 四 年 三 十 正 大 刷 印 日 十 月 四 年 三 十 正 大

川柳雜誌

號 月 四



新聞柳壇雜感

麻生路郎 (二)

反響

肩が凝るばかり……………安川久流美 (二五)

大兄の主張正當……………坂井久良岐 (二五)

「の」が本當である……………森 東 魚 (二七)

論ずる値なし……………坂井久良岐 (二八)

近作……………麻生路郎 (五)

川柳入門 自然の滑稽

遲日莊主人 (二)

近作柳樽

路 郎 選 (八)

募 大 工……………齋藤松窓選 (六)

集 島……………安川久流美選 (七)

流 連……………高橋古城山 中川露太樓 共選 (一八)

▲本社二月例会(蘆穉記)……………(二二) ▲金熊寺から砂川へ(零骨記)……………(六)

▲第一支部句會(二柳子記)……………(一〇〇)

川柳塔

徹底郎、蘆穉、零骨、輝翠、二柳子、莢豆、一聲、飛水、一洲、彩霞、柳路、かほる、松雨、雅幽、古城山、啞人……………(三)

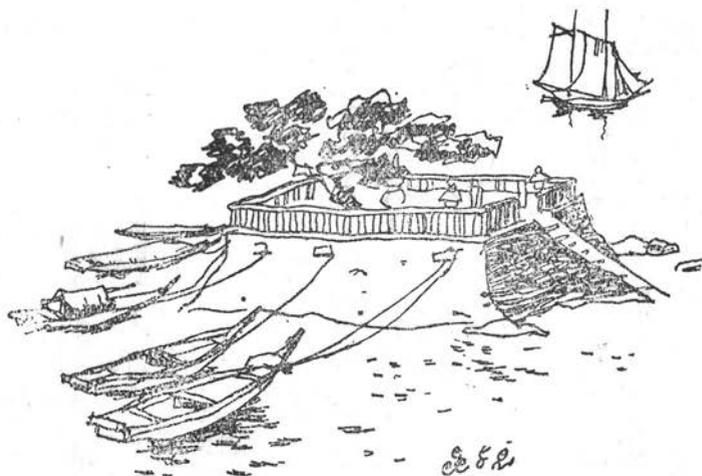
▲私設無線電話(太陽の子)……………(二九)

▲編輯後記……………(三)

新聞もの……………伊藤夜乃郎 (二三)

川柳雜誌

第一卷第三號



現代人の思想にびつたりと觸れた詩云へば川柳の外にはない。川柳は短歌の如く貴族的でなく、俳句の如く隠遁的でない。人間味のびちびちとしたところを躍動させる短詩型としては我が川柳あるのみである。我等は此の川柳によつて後人に語り伝える喜びをもつてゐるのである。



新聞柳壇雜感

麻生路郎

明治大正川柳發達史といふやうなものを書く人があらざらば、新聞柳壇といふものを見通すことは出来ないと思ひます。

川柳が今日のやうに旺んになつたのは全く新聞柳壇のお蔭である云つても決して過言ではありません。

劍花坊氏の日本新聞時代や、久良岐氏の電報新聞時代を云々するまでもありません。おそらく明治大正年間の川柳家で、新聞柳壇に關係が少しもない云ひ得る人は一人もないと思ひます。殆んど十中の九人までは、この新聞柳壇から生れて來た作家であります。

例ひ文藝雜誌の柳壇や川柳専門雜誌から生れた人達でも新聞

柳壇に全く無關係だといふ云へますまい。

それ位、我々川柳家の爲めに貢獻して呉れた新聞柳壇が今日一般川柳家によつて重視せられないのは何故でありませうか。

これは川柳家としては非考へて見なければならぬ重大な問題であると思ひます。

新聞柳壇が一般の川柳家に重視せられない第一の理由は、新聞柳壇の句は川柳として拙悪なものが多いといふ點に歸着するやうであります。川柳家の眼から見れば新聞柳壇の川柳は川柳の幼稚園であつて、よくもあんな拙い句を作つて満足が出来るものだと思ひます。しかしさう云ふ川柳家自身も會ては其の新

聞柳壇に投句して、自分の句が活字になる歡びに血潮を湧かした一人ではなかつたでせうか。

それが何時の間にやら、川柳家として川柳専門雜誌に句稿を發表するやうになります。新聞柳壇といふものは振り願つても見なくなりませう。そして、僕も新聞柳壇の投句家時代があつた。云はぬばかりに、それ等の作家に對して先聲顔さへする有様であるやうに見受けませう。しかし、これは大いに誤つた考へではありますまいか。

◇
新聞柳壇は單に、川柳家から蔑視されてゐるばかりではなく世間の人達からも、新聞柳壇は話らない云はれて居ります。否、川柳は話らないさへ云はれて居ります。

世間の人達は、ほんごの川柳を知りませぬ。彼等は皆、この新聞柳壇の川柳を見て、あんなものは文藝的價値なごは少しもない。あんなものなら幾らでも作る。ミ斯う罵倒を浴びせかけませう。

これ等の罵倒は川柳をほんごに愛する者にまつては恐ぶごの出來ない屈辱であります。そして君達はほんごに川柳を知らないからそんなごを云ふのだごやり返しはいたしますが、世間の人達は決して、それに屈しません。なごに、川柳を知らんごがあるものか。川柳を知つてゐればごを詰らないご云ふの

だご更に云ひ返します。彼等の知つてゐるごいふ川柳は即ち新聞柳壇の川柳を見ての話してであります。

ほんごの川柳を作つてゐる人達か、世間から川柳をみごめさせやうごして幾ら努力したごころで、これではいつまで絶つてもみごめられる時代が來ないのが當然であります。

◇
そこで、ほんごに川柳を世間からみごめさせやうご思つたらば、先づこの柳壇の革新から圖らなければ駄目だご思ひませう。川柳家の多數が、紙面が足りなくて發表するのに困難を感じてゐる川柳専門雜誌にばかり立て籠らずに、ごしくその作品を新聞柳壇によつて發表するごころであります。そして世間の人達の誤つた川柳觀を打破するごころが、一戦からみごめられるための捷徑ではなごらうご思ひませう。

今日川柳専門雜誌が幾ら澤山あるからご云つても全國に於ける新聞柳壇の數ごは比較にならないであります。そして専門雜誌の發行部數ご日々發行された新聞柳壇の發行部數ごは更に比較にならないでせう。

その比較にならないご多數の發行部數を有する新聞柳壇を川柳家が無視して、川柳を世間からみごめさせやうごいふごは、餘りに愚かな話ではありますまいか。

新聞柳壇には又新聞政策ごしての方針もあごごであります

りますから、必ずしも川柳家の自由にはならない點もありませう。多數の讀者兼投句家を満足させるためには、主として滑稽な句を選ばなくてもありませうし、又極く初心者の句は添削してまでも載せなければならぬ必要も起るであります。

しかし、相當の作家の句が、それ等の句と共に發表せられたならば、川柳必ずしも拙い句ばかりでないといふ世間の諒解も得られます。初心者にしましても、それ等の佳句を讀むうちには自ら教へられて句の上達を速かにすれば、句の傾向を知るの便宜さへ與へられることになります。

◇

果して、さうだミすれば一舉兩得だミ云はなければなりません。新聞柳壇を今日の如く無視することは、世間の人達が川柳を蔑視するよりも、より以上に誤つた考へだミ思ひます。

しかし、新聞柳壇の選者が必ずしも、川柳に忠實な川柳家でないことも考へなければならぬのであります。

たゞ新聞の編輯に従事してゐるが爲めに、川柳位なら僕でも選が出来るといふデモ選者が選を擔當してゐる新聞が少くないのであります。それがために相當の川柳家は、之に投ずることを潔しとしないのもあります。

餘な川柳があつたらぬか、柳壇が一向奮はないといふ新聞社がありましたならば、選者について考へて見る必要がありませう。川柳家の方でも、そんな柳壇に對しては、相當な選者を

推薦し、應接的に投句して、新聞柳壇の隆盛を期しなければならぬと思ひます。

◇

新聞柳壇の選をされた方は、御承知であります。が、いくら好きな川柳であつても新聞柳壇へ送つて來るやうな句ばかり繰返して讀まされることは選者としては可成りな苦痛であります。それでも、それ等の投句家の中から、相當の作家が出てくれればといふ期待をもつて、随分根氣よく選をつづけて行きます。そして、相當未來のありさうな投句家の句に接する一種類のよるこびを感じます。

しかしそれは長くは續きません。時々いゝ句を見せてくれると思つて、心ひそかによろこんでゐます。川柳専門雜誌の方へ首を突つ込んでしまつて、新聞柳壇から全く影を没してしまひます。その時に選者は軽い失望を感じるものであります。

柳壇は再び團栗の背並べになり、拙悪な句の集合地となるのであります。同時に世間からはこの時の柳壇を見て川柳は詰らない云はれるのであります。

新聞柳壇を埋草のやうに考へてゐる新聞社の編輯局の人達にも、新聞柳壇はもう我々のお出ででないさ考へてゐる川柳家にも、ほんのり川柳が、世間の人達に認められるやうになるまで新聞柳壇を活躍させるため、お骨折が願ひたい。

川柳家はその積りになつて少しく努力すること、新聞社の人々に少しく骨を折つていただきさへすれば、新聞柳壇の革新はさして難事ではないと思ひます。

近作

麻生路郎

資^し本^{ほん}家は寝^ね衣^いのまゝで逢^あふてやり
勞^{らう}働^く歌^か萬^{まん}歳^{さい}さいふ聲^{こゑ}でなし
雜^{ざい}兵^{へい}に拜^がまれにけり選^{せん}舉^{きよ}權^{けん}
反^{はん}感^{かん}をみくびつてゐる支^し配^{はい}人^{にん}
引^ひ止^どめて新^{しん}茶^{ちや}をいねるくらしむき
羊^{やう}羹^{かう}のすこしかたいも舊^{きう}家^からし
けむだしの掃^{そう}除^じに吞^はの日^ひをつぶし
春^{はる}の末^ま妾^{めかけ}もすこし考^{かう}へる
惚^{おぼ}られてゐるさは知^しらぬ十三四
麥^{むぎ}畑^{はたけ}腰^{こし}から上^{うへ}の人^{ひと}通^{とほ}り

ふて砂川の奇勝へ足を向け、富田溪仙氏の畫を見る様な稻荷さんを池の向に見て二時半頃砂川で尤も眺めのよい峰へ出た流石は泉州耶馬溪の稱あるだけに、おもしろい岩や松がわれ／＼を喜ばしてくれた。此處で『梅』と『砂』の二題を作つた。スフキックスに似た岩を脊負つて此處でも一同の笑顔をカメラに納めたのち歸途についた。

梅 麻生路郎選

まだ咲く梅へ何處の牛が鳴き
梅の枝今日の縮緬へ引つたり
梅咲く咲かば母の便りなり
聞て來た程に見られぬ梅の花
この梅の花は仲居の手を受け
梅見にはけなりがらぬ居候
鶯も啼かせず庭の梅は散り
梅林へ邪魔にならば建てかゝり
まだ酒をこき此處らの梅のよき
まア待てよ云つても梅が咲き
鉢植の梅を流連吹き散し

波郎 千代二 右平 輝翠 零骨 かほる 古城山 啞人 芦穂 幽香 同

白梅は戀を語るに淋しすぎ
梅咲いて茶店へ通ふ仲居なり
梅を見る人に笑ふ洒落もなし
雪の降る日紅梅のいた／＼し
梅は良し烟を熱うに頼みます

梅林を先へ抜けるは酔ふてゐず
心得て仲居は梅の枝を折り

砂 本田溪花坊選

足袋の砂は置いて洒落を云ひ
砂ほこり追ふ様にして通り越
砂原に二人の姿消れて行き
駱駝の脊見上げる様な砂の山
賑やかな通を抜けた砂ほこり
打ら上げて來る波砂の音を立て
この砂を買つて少し鉢に置き
大道の砂書へ寄る人だから
密會はごつちも砂を拂てやり
飯の砂聲は黙つて膳を出し
洗つたに亦蛤が砂を吐き
膝の砂行列はるか通りこし

松郎 光太穂 同 同 同 路郎 同 波郎 千代二 柳骨 松雨 右平 輝翠 零骨 一聲 かほる 啞人 芦穂 光太穂

くたびれた靴の中を砂を見せ
砂道を通るに足袋を脱ぎ行き
砂書をして二人の立話し
トロツコをコッソリ當り砂が落ち
宿帳に足袋から砂が少し落ち

砂に字を書き相棒うなづかせ
兩手からこぼれる砂は陽に光り

(天)

飛び越ゆる心算へ砂が跳上り
飛び越ゆる心算へ砂が跳上り

目錄の値段

畫家の個人展覽會へその知合ひの紳士がやつて來た。
畫家「貴方、是は僕の畫のなかで一番好い出来なのです。貴方でしたら目錄の値段の半額にして置きます」
紳士「目錄の値段の半額ですつて、今私は人口で二十錢出して目錄を買ひました。」

路郎 二柳子 同 幽香 同 光太穂 松郎 芦穂

歪よこんでる茶碗ちawanゆがんだまゝで賣うり
 郵便ゆうびん屋や障ざん子こ一寸程いっせんぢやうぢやう開ひらき
 松まつ之の助すけ橋はしの上の上ではきつミ投なげ
 風呂ふろを出だしてモデルミ言いつた型かたで拭ぬぎ
 金かね棒ぼうへめざしのやうにぶら下さり
 三角さんかくこなつて田地でんちの價ねが下くだり
 絹きぬ衣い具ぐを着きせて賣うふた先まきが知しれ
 遅おそくなりや泊とどるつもりで番頭ばんとう出でる
 住友すみとの巡査じゆんさ退屈たいくつさうに立たち
 すぐそこへ行くのに娘鏡むすめがみを見み
 何事なにこともないのに娘むすめ又また笑わらひ
 嗽くせするやうに鷄けい水みづを吞のみ
 親切しんせつな巡査じゆんさ一いっぺん振ふりかへり
 人ひと情なさけがあり兩方りやうほうへ嘘うそをつき
 呼よびに來きたのは暖簾のんぜんから顔かほを出だし
 煮豆にま屋やは一いっツ轉ころるぶぎ手てで掴つかまみ
 立た志し傳でんその第一だいいち頁ぺい草鞋くさじばき
 給仕きよだしには私用ししやうばかりに君きみがつか
 ボロイ事こと話はなしてゐてもゴムの靴くつ
 口くち歪よこめながら缺かの切きれぬ事こと
 例れいへ話はなまでして大金たいきん渡わたされる

同 朝鮮 同 柳也
 同 大阪 同 順三
 同 平野郷 同 助六
 同 大阪 同 凡平
 同 同 同 天海
 同 同 同 一柳
 同 石川 同 白柳子
 同 大阪 同 正洲
 同 墨江村 同 双柳
 同 大阪 同 嶺月
 同 同

本ほんを讀よみまねの出來できないこの孝行こうぎやう
 親切しんせつな人ひとミ思おもへば案内あんない者もの
 意味いみのあるやうに女給にょぎやうは笑わつて見みせ
 雨傘あまがさの用意よういもしてく嫁よめ女にょなり
 何なにこなく悲かなしい時ときのペンペンの先まき
 おかしくもないのに笑わひ又また笑わひ
 避雷ひらいじん針はり何か待まちつてるやうに立たち
 十七じゅうしちや八はちミ思おもへぬ出帶しゅたいぶり
 奇術師マジシャンの子こは子こながらに繩なはをぬけ
 阿部野あべのから歸かへる會族かいぞくはカバカバを着きせ
 魚屋いさやは蜻たきの頭あたまはふつて見みせ
 少すくし遠とほいミこに聞きこる蓄音機じゆくおんき
 活動かつどうでこそ大事件だいじけんにもならず
 なかばまで讀よんであはてる置手紙おきてがみ
 大正琴たいしやうしん上手うでになつていやになり
 嘘うそを言いふ便利べんりに出來きた口くちがあり
 石切いしきり嚙かッソッソンンくミ日ひが暮くれる
 水車みづぐるま小屋こや人の知しらない梅うめが咲さき
 女房にようばうの智恵ちゑ魚屋いさやに借かりあり
 引越ひきこしの先まづゴゴンンくミ鳴なる時計とけい

同 同 冷笑
 同 同 同 眠聲
 同 同 同 夢路
 同 同 同 同
 同 神戶 同 夢遊
 同 大阪 同 小人
 同 同 同 藍之助
 同 同 同 月の輪
 同 神戶 同 寸馬
 同 堺 同 波路
 同 同 同 倍喰
 同 同 同 夢六
 同 大阪 同 猪太郎
 同 天下茶屋 同 柳骨
 同 神戸 同 番翁
 同 廣島 同 一兵
 同 同 同 桃里
 同 全澤 同 柞果

川柳
人門

自然の滑稽

遅日莊主人

同人の啞人君が、五つ六つになる女の子をつれて遅日莊を訪れて来た。

「ここが遅日莊に来るよ、啞人君はたちまち川柳家の啞人君になつてしまつてこの女の子のお父さんとしての啞人君でなくなり、女の子は父、女の子で、お父さんの手から全く解放されてしまひ、遅日莊の子供のお友達としての女の子になつてしまふ。

そこで、遅日莊の奥さんや女中は、食事の時に、この小さなお客様を歓迎しながら、いろんな事を聞く。

「おかアちゃんの名は？」

「菊助。」

「ミ、女の子が答へた。

「さう。」

「さいつた女中は眼を丸くした。そしてニ

ツコリミ笑つた。

「奥さん、この子のおツ母さんの名は菊助ださうですよ」

「珍しい名ですね」

「さいつた奥さんの頭の中にも、閃くものがあつたらしい。

啞人君が女の子をつれて歸つたあこで遅日莊の主人は、奥さんから藪から棒の質問をうけた。

「啞人さんの奥さんは別嬪サン？」

「ウン、別嬪だが……それがさうしたんだい」

「出てゐられた方ですかね」

「そんなことは聞かないよ」

「でも、菊助さいふ名は素人ぢやないでしょう」

主人は思はず、ふき出した。

菊助さいふのは啞人君の名である。女の子はお父さんの名を聞かれたものと思つて、菊助さ答へたのを、聞いた方ではそれを母親の名として、いろんな想像を逞しくしてゐたのであつた。そこに錯誤があり、矛盾がある。しかも頗る自然である。川柳の滑稽は斯うした境地に生れるのである。拵へた滑稽の句に、いゝのがないのは、かうした錯誤や矛盾がないからである。

滑稽な句を四つ五つ列べておく。

下女まじめ出まして留守で居りまへん

心太ひよろ／＼／＼さかしこまり

鶏があくびをしたさつんほいひ

あの女房すんでに俺がもつ／＼ころ

うれ残りけに十日の見る／＼ころ

下女でなくとも、相當な人で斯うした

こを平然と喋つてゐる人がある。心太

の句は擬人法の句であるが、生きものとして扱つたところに滑稽がある。その他

の句は同じく滑稽ミ云つても、悲哀の伴つた滑稽である。

本社二月例會

十五日午後六時
於 端 坊

金剛の嶺も、六甲の嶺も眞白だつた。風は魂を奪ひ去る様な寒い晩であつた。降りかゝる雪を拂つて參會される熱心さには敬服せずには居られない。この熱心が生む句に駄句のあらう筈がない。人数は少かつたが收穫は左の通りである。參會の諸氏は

路郎、水府、浚花坊、松郎、幽香、波郎、かほる、茂男、百石、千代二、順三、飛水、幸堂、子行、蝶哉、進午、一洲、輝翠、古城山、光太樓、二柳子、力好、雲雀、夢路、多聞、柳骨、双柳、松雨、芦穂の二十九名、(芦穂記)

眼 (宿題) 路郎選

眼のふちをはらし娘申し立て
先方の眼を考へる贈り物
拗ねて立つ眼は口程の様で
ふと醒めた眼に煙草盆遠す
爲にも叔父の眼尻は筋をひき
停電に眼は何物か探がすなり
眼の埃吹いてやる程仲がよし
爪弾に脇息は眼をつむり勝ち
色めがね掛り眼科へ二人連れ
伊達眼鏡左の方が下つてゐる

幸堂 徹底郎 子行 同 水府 一聲 力好 幽香 二柳子 薰石

縁切の話眼にしむ風が吹き
泣かされた眼で四人が樹を立ち
眼薬は開けてる口が邪魔になり
のゝこ云ふ子に親の愛はみち
眼の見ゆる人を笑つて肩をもち
目と鼻の間の小火を知らぬなり
惚てるゐるのに合ふた眼をくそし
眼にみわたした事を幹事のゐる酒落
鮮かに見せる手品に眼がかさる
新聞がもう見ませぬの眼付
賣り出しの中で和服の眼が光り

多聞 雲雀 多聞 順三 夢路 零骨 光太樓 千代二 芦穂 凡平 春篋

入レ齒した事が旦那の眼に
眼ばかり光る人形はけて来る
眼かくしの両手をこまな好な人
(人) 鯛の眼を知つて人の咽喉佛
(地) 眼薬をこも林檎の皮をすて
(天) 手枕の眼にパチく 燈明
鳥目まは母の柳も知つて居り
姉 (席題) 水府選

光太樓 古城山 雲雀 徹底郎 蝶哉 幽香 路郎 路郎 同

極道へ姉の言葉の優しすぎ
 來容ミ臺所に姉甲斐くし
 出前持ち無口な姉に叱られる
 姉さんに惚てる様によそ來る
 嫁にゆく姉ミ近頃仲がよし
 一ツ上の姉へ妹の口答へ
 柄一ミつ撰るのへ姉は口を添へ
 復習にへら臺の姉手を借られ
 姉の眼によつほさませた帯をしめ
 吳服部を姉はゆつくり廻るなり
 姉ミ來て心齋橋にはかざらず
 學校でさう習ふた姉の知恵
 姉さんがあておいたアイウエオ
 姉さんミ歩いて誰をはばからず
 躡け糸にも姉様ミ云ふ氣轉
 姉に附合ふて貰ふて毛糸針
 あやまつて呉てる姉が小さ見
 まづ姉を叱つておいて譯を聞き
 (佳)宿題は姉もやつちわらない
 喜多村に似て悲しみの多い姉
 逢へばまたうるさく姉は繰返し

松 郎
 同 同
 同 同
 波 郎
 同 同
 輝 翠
 同 同
 雲 雀
 順 三
 古城山
 力 好
 夢 路
 茂 男
 芦 穂
 溪花坊
 幽 香
 進 午
 飛 水
 芦 穂
 子 行

里歸りするたび姉の心がけ
 姉一人あつて苦勞の男なり
 ある時は夫婦の様な姉をもち
 姉の産手傳ふための船で立ち
 (五笠)制服の弟、姉に見降され
 その憂ひ包んで姉ミ箸をさり
 姉の顔この頃急に年をさり
 結立へ負はれたがつて困る姉
 給仕して今年十九の姉があり
 (人)背の異見に姉は座をほじ
 (地)刀自ミ云ふ姉に頭を押し
 (天)理解して呉れさるる姉の文
 席題 (和服) 溪花坊選

百石
 千代二
 力 好
 溪花坊
 進 午
 雲 雀
 路 郎
 茂 男
 夢 路
 幽 香
 蝶 哉
 幽 香
 幽 香
 二柳子
 芦 穂
 進 午
 光太樓
 柳 骨
 夢 路
 百 石
 一 洲

花嫁は衣裳ばかり替居り
 棟梁の和服は判を捺す日也
 叮嚀な御辭儀和服へよくうり
 三次會和服の一人いつち酔ひ
 袴はづして平鹿のウニで呑み
 奥座敷和服に來る間待たされる
 びりり吞む氣和服に替來る
 刑事室私服の前の和服なり
 出勤簿和服の日は書いてな
 (人)逢民り和服の頃の瘦を云ひ
 (地)聽診器今日和服手で丸
 (天)お忍びの和服に仲居さるる
 鶏 (席題) 古城山選

薰石
 力 好
 多 聞
 蝶 哉
 松 郎
 古 城 山
 輝 翠
 水 府
 同 同
 幽 香
 雲 雀
 力 好
 かほる
 同 同
 幽 香
 同 同
 松 郎
 波 郎
 路 郎
 力 好

大阪の客に鶏一羽減
 鶏を飼氣になつて年をこり
 思案する眼に鶏は何か喰ひ
 難ツ子の喧嘩親鶏知らぬ顔
 折檻のやうに鶏チギにかけ
 鶏をうつかり蹴つた出入方
 都からさりたい養鶏法を知り
 鳩のなかに鶏もゐる午さび
 (佳) 鶏を追へば踏切越し逃
 鶏へレンズを向る出養生
 道聞きによるこ鶏飼てる
 白の米鶏ぬき足でやこ来る
 燃の上る焚火に鶏バツミ立
 郊外に出て養鶏の趣味に替へ
 (秀逸) 恙なく鶏今日の日を送り
 鶏を追へば不服な顔をする
 鶏は餘つ程掘つたつも居
 寺(席題) 互

シゲテ 百石 子行 進午 蝶哉 子行 夢路 千代二 路郎 同 松郎 多聞 溪花坊 一洲 百石 水府 同 選 多聞 飛水 夢路

自轉車で和尚灯のつく頃歸り
 陽を拜む寢巻の寺が高すぎる
 司令部になつてお寺に暮がり
 寺からの用事に母の忙がしき
 寺町へ出て一丁が長く見へ
 珠數を操りつ番僧は先に立ち
 咳拂お寺一ツばい響くなり
 説教の寺へ三ツ四ツ下駄を越し
 寺の鐘スワ鎌倉云ふ響き
 黒枠に電車道から遠い寺
 この裏家寺の銀香に困るなり
 招きてゆけばお寺に蓮が咲き
 御用きお寺をはすに抜ける也
 一心寺夫婦の様に下駄を脱ぎ
 白蓮のやうに梳髮寺に居る
 寺の晝裏へ廻るこ米を研ぎ
 首巻をしたまふ寺和尚會ひ
 水一杯くむのにお寺手間が
 洗濯を茨に干した寺男
 支那(席題) 互

蝶哉 輝翠 一洲 古城山 力好 子行 同 雪雀 同 溪花坊 路郎 同 幽香 同 松郎 同 同 同 同 飛水

乗換に支那の會話がチト途切
 一儲けする氣支那の手紙呉れ
 片言を言ふて支那傘一ツ賣り
 支那そばに潜りがあった堺筋
 髭むしやにな支那から歸つて來
 一ツべん支那へ行く氣の若旦那
 支那の屋根のんびりせよこへり
 一儲けに來た支那のやこし
 支那火鉢家族の皆な丸うなり
 支那人はズボンに兩手入れた
 支那人は馬鹿だ二三等卒話し
 支那の土産をみんなきたなり
 高島屋支那部へ油こりに來る
 梅蘭芳知つてるやうな燒栗屋
 支那はさうぢうぢう數から棒の母
 親旦那支那へは行つた事があり
 支那製にま置き替へる骨董屋
 纏足は薄水を踏む歩き振り
 人形を送れ支那の租界から
 浪人をして支那街でめり途ひ
 此事がばれたら支那へ行氣也

蝶哉 輝翠 進午 茂男 同 かほろ 同 波郎 順三 同 芦穂 同 水府 同 松郎 同 溪花坊 同 同 路郎 同 同

反

響

肩が凝るばかり

安川 久流 美

○
川柳雜誌三月號正に着宿酔の床の中から息せず讀みました
(路那曰く金玉の文字を宿酔の中に讀むとは怪しからむ)

文章いづれも面白し。(路那曰く、大いに提)殊に「難句に就いて」の貴兄の考へ方には至極同感であります。古句の原本はいざ知らず複刷の活字本にすら校正の誤りがあつて複刷のみを信じて讀む人には謎の句が、いよく迷宮に入るまいふ皮肉があります。

其の一例は、私の持つてゐる『誹風柳樽卷之一』複刷(明治四十一年六月發行)の第十四編中亥年力角句合に

にこついて一人りか二人負傷出る
こいふ句があります。此句は後日原本と引合して
にこついて一人りか二人富場出る

であることが判りましたが、他にも右の例が澤山あるだらうかと思ふ。
斯ういふ風にして時代の推移と共に、若し原本が無くなるこ

勢複刷が更に複刷されて、より以上の滑稽が現出されぬことも限らない。負傷した者が笑つて出るまいふ句になるか如何なる未だの川柳博士も匙を投げるであらう。呵々。

で、私の考へもいつか岸本水府氏が來澤の際座談せられたかた如く難句は火になつて究めなくも次から次へ自分の會得の行くのみに眼をくれるのがよい事と存じます。石川縣下に有名な吉崎嫁おさしの肉附面に就て寺々寺々が、本家争ひをしてゐるが、未だいづれも眞偽の決定がつかないさうです。

面を作つた者も、嫁をおさした姑の此世にゐない以上、そんな考證家が出ても却々むづかしい話じやありませんか。

古川柳にも斯うした閑人の閑論(路那曰く閑人の閑論は)が度々繰返されるは愚です。いつか角戀坊氏と鈴ん坊氏が

國家老顔をしかめるものを踏み

で、「血めぐり」に「手紙」の論があつたが、之等も手紙で解釋された鈴氏は深く考へ過ぎた結果で、古句研究に斯うした徒勞のあるは、第三者の肩が凝るばかりです。(三月十八日)

大兄の主張正當

坂井 久良 岐

(前略)

犬を去り

募

大工

集

日曜日大工の眞似をして過ぎ
 安普請佐官ミ大工馴染なり
 焚火から離れて大工ミぎ始め
 足場からおりる金槌腰へさし
 棟梁の引とその後すかして見
 鉋屑踏んで御飯を知らせに來
 鉛筆を耳に大工は晝にする
 一服に大工でつかい火を燃し
 棟あけに晴はれと顔が見ぬ
 船大工船の底から唄ひ出し
 笑はれる大工に凄腕があり
 新築の薫りミ音を大工立て
 拭き入れてからの柱に腕が見
 床の間になつて大工は腕を見
 休みの姿勢で大工思案をし
 うまいこころ大工は道具界ぐなり

夢遊 順三 啞人 月の輪 一閑子 進午 技呂 喜代志 小山 美濃守 正洲 京平 彌生 一倍柳 双柳

句

齋藤松窓選

土佐犬が寝をせつる大工小屋
 大工から大工へ墨の糸が引け
 道具箱持つた大工は乗りおくれ
 棟梁は棟梁だけの用をする
 普請場の前を近所は五月蠅かり
 平打の指で大工の鉋研ぎ
 棟上の祝上座は胡座なり
 をが屑を拂ふバツチの黒い事
 棟梁は仕事の外の腕を持ち
 片つばで睨んで大工また削り
 花道へ出て來る大工よい男
 青草眞擴けて大工申あけ
 鉋屑おしやつて大工飯にする
 犬小屋を弟子に任せて煙草じ
 内弟子ミ見ら大工が湯を沸かし
 手拭で軽くはらつて大工去に

是々坊 輝翠 川流 二柳子 一洲 零骨 余子郎 助六 徹底郎 句樂 同 彩霞 同 古々子 同 波郎

猿をかつこむ 松ヶ岡

對すべき句法に候徳種博士の猿のは誤
 記なるべく大兄の主張正當但し此句は狂
 句じみたる駄句。(路郎曰く、大兄の主張
 下さるのはいかすがすぐそのあさから根據
 の薄弱さをお示し下さるのは閉口です)
 美しい管大黒は袋持

これは今日流行の藝妓の元祖たる寶曆
 の江戸橋町の踊子の發展を示したも
 のにて當時の箱屋は母親なりし故
 踊子は天逆様の供をつれ

の句あり、この藝者が和尚に誦出されて
 寺の大黒になつてゐる。女犯の俗は日本
 橋に三日棒縛りになる當時にありては蓋
 し此句も佳吟なりしなるべく候
 併し今日にても傳統的風俗に立脚する
 川柳詩宗にして之を傳統に見て興味必ず
 しも薄きものには之無候
 川柳は一人一個の个性的に之無社會綜
 合美の生活上に現存すべき民衆詩に候此
 點まで十分徹底して理解せし川柳家なき

鉋屑大工は指へ巻いて言ひ

フィルムの大工へ大工手を叩き

文化村大工間取を見てかへり

鉢巻を取つて大工は塵を打ち

江戸ツ子の大工よりくしんをする

打つちやま歸る大工は明日も來る

鉋屑蹴つても鑿が見付からず

きつちりこ坐る大工に金のこ

墨付けて置いて大工は飯にする

もう歸る大工一度に然すなり

露次口に便利大工が邪魔に

普請場へ福井茂兵衛の紺バツチ

判賞つて家主の大工歸るなり

島

島の名を船長だけが知てるる

しげつづき島の女出來ちまひ

追分びに追々島が遠くなり

島影が見えて女は元氣づき

あの島も小學校が有る言ふ

電報を握つて島を齒痒のがり

同 一聲

同 寸馬

同 芦穂

同 古城山

同 同

同 同

同 松郎

波郎

香氣坊

彌生

美濃守

猪太郎

芦穂

草餅を母家で大工よばれて來

大工も遠くはなれて筆を持ち

(佳)鋸をビンニ云はき耳を立て

その家の家賃を大工尋ねられ

思ひ切り腕を伸ばした鉋屑

地團太を踏を大工は板を替

砥いでゐる大工は道を尋ね

大工云はず大工の初曾なり

建あげた棟を見上げて猪口を

鉋屑千切つて大工詫てるる

(人)板一つ敷いて大工は書に

(地)眼鏡を拭いて大工逢ひ行き

(天)這入り出て大工が戸を

安川久流美選

要塞に面して馬鹿にならぬ島

大漁の島の幟へ陽があたり

戸締りをせぬ氣樂の島に住み

島人の情に一人生残り

地圖で見る伊豆七島は撒た様

霞んでる島に船長獨り言

同 同

同 助六

同 嶺月

同 白柳子

同 峰月

同 松郎

同 芦穂

同 古城山

同 松郎

同 芦穂

同 徹底郎

同 同

同 句樂

同 同

同 松郎

事を悲しみ申候
但駄句滿載の雜誌のみ多き柳壇は御同
様惚嘆に存じ申候(三月十八日)

「の」が本當である

森 東 魚

(前略)四月號へは一つ何か書かせて
いたゞきませう。もう締切が間に合なく
ば五月に願ひまう。(路郎曰く是非
「誰句に就て」は面白く拜見しました

私なごも兎角考證辭にのみ流れて自分の
趣味に溺れて困います。(路郎曰く謙遜
あつた)あの松ヶ岡の句は偶電車で貴兄の雜
誌をよみましたはつて直柳樹(何編か不明多
分八十編近所(文政八年版)八十八編の
作者三顔振れが同じですから)をみるこ
見つかりました。不思議な氣がしました

川柳評の内
戊を捨申のかつこむ松ヶ岡 横 月
さあります。矢張のが本當なので、(か
つこむ)は、驅つ込むのナマツタのだミ
見てよからうと思ひます。(路郎曰く前

箱庭の島に大きな人の影
 島廻り天狗の話もきかされら
 島らしく見へ船中は蘇へり
 十日分仕入れて歸る島の人
 こんな島も思はれぬ町があり
 日本は島だと思はれて來る
 鳥見を連は天にもまかされず
 あの島の後へ廻る浪がしら
 癒らない病を決めて島へ來る
 隧道を出るさ違つた島に見は

流連

古城山
 流連の兄を迎へら組紐
 友達を聞いて流連面倒がり
 流連に張合のない灯がごもり
 流連へこれを呑んだら云々
 流連の眼にきんよりの雲が見
 馬鹿騒ぎする流連へ刑事の眼
 流連けて歸れば敷居の高い事
 花を引く事も流連け教へられ

同 一兵 雅幽 啞 春篁 枝呂 一休 輝翠 古城山 同

選 柳路 一洲 雅幽 京平 美濃守 一休 竹榮 月の輪

寝ころんだまま島を見出養生
 ほんやり島見て歸る病の上り
 松の木を害かぬ島島の繪
 船長は島へ珍話を言ひ残し
 水害の様にも見ゆる嚴島
 發見をした人の名の島さなり
 藤椅子にもたれて島の雨を知り
 一行の一人は島を雲さ見る

高橋古城山共選

へめぐる島のお宮に千社札はへ
 流連の障子に朝日むごく映し
 流連の一人苦面に驅け廻り
 流連が硯を借りて手を叩き
 衣擦れの音を流連寂しがり
 もう歸る々々が暮れて流連し
 流連へ曳子少しの無理もき
 流連の歸り魂抜けたやう
 飲みたくも無く流連の空騒ぎ
 流連へ面當らしい空財布

順三 零骨 久樂 白柳子 倍喰 琴月 古城山 松郎 久流美

豊人 不越 順三 進午 寸馬 春篁 一柳 白柳子 正洲

論ずる値もなし

坂井久良岐

「犬を捨て申のかつこむ松ヶ岡」でありま
 すお示しの句と文字が違つてゐますから、外
 骨氏の示された句さ、出處を異にしてゐるか
 も知れません。松ヶ岡の如き句殊に此句には
 類想があり相です。更一句がツマヌのは
 に御研究を煩はします。句がツマヌのは
 文政時代の句だからでもう墮落して來て
 るる時代ですから仕方がありませんね一
 寸氣づきましたま、お知らせ致します。
 (三月十九日)

昨夜藥研堀也奈貴に也奈貴柳句會を催
 す。談中森東魚兒曰く柳多留八十何篇(狂句)に
 戌を去り申のかつこむ松ヶ岡 横 好
 さありこの事に候。従つて狂句なれば論
 する値もなし(路那曰く御熱心敬服の外な
 さは始より判つてゐる筈です。先生として
 はいささか心細き言ならずや。それに外骨
 氏の示された句さ、東魚氏の示された句さ
 文字を異するごに、注意しななければならな

流連のふみ氣にかゝる帳簿筒
 流連は降込のられた事を云ひ
 流連は一人に成つて腕を組み
 流連へ長い女房の手紙来る
 流連の歸り女の智恵も借り
 流連の歸りに街の明かる過ぎ
 流連は世帯のやうな飯を食ひ
 流連が歸つた後の書き潰し
 流連を迎へに行き野暮がられ
 よい思案出ぬ流連の電話口
 洗はした足袋に流連ちこ困り
 流連はさうなせいこ横になり
 酒ばかり呑む流連にちこ困り
 流連へ道頓堀は今日初日
 隠れてた様に流連起て来る
 (五谷)流連に女は感傷的に成り
 時ならぬ時に流連腹が空り
 流連て名所を飛ばす一人旅
 流連はよもやの手紙見て歸り
 流連は女を變へて見たく成り
 (人)流連が思案に降る段梯子
 (人)共鳴の流連細く長くなり

是々坊 凡平 枝呂 史風 夢六 彌生 一閑子 徹底郎 句樂 零骨 同 波郎 同 松郎 藍之助 古々子 峯月 一 聲 啞人 琴月 喜代志

(地)流連の心に背負ひ切ぬも
 (天)流連へ今日は歸る陽が當り
 露 太 樓
 流連は芝居の話きかされる
 流連の煙草は舌にしむばかり
 流連の兄を迎へる紺緋
 流連のかへり女の智恵を借り
 流連のかへり魂ぬけたよう
 流連を迎へに行き野暮がられ
 流連はさうなせいこ横になり
 流連が思案におりる段梯子
 流連へ道頓堀は今日初日
 流連をしたこまかけぬ日記帳
 流連はよもやの手紙見て歸り
 流連の心に背負ひきれぬもの
 流連のあした茶漬の舌さわり
 よい思案出ぬ流連の電話口
 床の間の花を流連チトなほし
 流連は世帯の様な飯を喰ひ
 (人)時ならぬ時に流連腹かへり
 (地)流連へ今日は歸る陽が當り
 (天)流連は矢つ張り母宛て書

選遊 川德 史風 柳路 夢六 一 柳 句樂 波郎 琴月 松郎 彌生 一聲 輝翠 是々坊 零骨 峯月 一閑子 古々子 夢遊 啞人

い。更にもつと近い例をあげれば、先生の示された句さ、東魚氏の探しあてられたものは同一の句なるべきに之又文字が違つてゐます。考證家の頭腦は失禮ながら今少し緻密を要しやうか。(三存) 三存申候(三月十二日)

示 談

屠蘇に酔つた男が二人些細な事で喧嘩を始めたところ其處へやつて来た巡查がミウウ警察へ引いて行つた。處が警察の署長は頗る同情のある男であつた。

署長「こんな事は示談で済ましたらさうだ」
 二人の男「實は巡查さんが来た時さうしたいと思つたのですが、無理に引つ張つて来られたのです。」

手 遅 れ

醫師「電話を切つて仕舞へ、手遅れをし
 てしまつたよ」

醫師の妻「患者は駄目だったのですか」
 醫師「いや、もう治つて仕舞つたのだ」

第一支部句會

二月二日夜
築港人事館

周圍が靜かで作句には持つて來いといふ人事館は、少し電車道からテコらなければならぬが、川柳に忠實な諸氏には、そんなことは問題でない。定刻前から詰めかけて主催者を急ぎたてるといふ熱心さである。當日は路郎先生から初心者に對して行盆な口演があつた。(二柳子)

路郎、溪花坊、古城山、子行、右平、茂男、千代二、助六、薰石、輝翠、一聲、雅幽、松雨、苜穗、二柳子

繪馬 麻生路郎選

繪馬堂とは樂天地そこに見へ
繪馬堂の下で一度地圖を見る
新しい繪馬賣つて居る稻荷前
色あいは失せて櫛の繪馬残り
住吉云へ子供は繪馬を云ひ
先着は繪馬を脊にも待つて居る
繪馬堂へ拜んだ願にやつてやる
繪馬上で悪友やつて來る
繪馬堂で縫れて寫す松之助
由緒繪馬に團體呼びあつめ

凡平 悟郎 吞骨 零骨 叫骨 一聲 輝翠 古城山 溪花坊 芦穗

辻堂へ慾のこもつ繪馬をあけ
仰向けば繪馬の一字が氣になり
繪馬堂に立てば石段からの風
ほつとした眼に繪馬堂は廣
(人)名刃も繪馬と並ぶ鏡が
(地)まの繪馬も鳩のまつた跡
(天)間男をたづねて繪馬もあり
上戸 本田溪花坊選
こもすれば背筋の立つ上戸なり
酔ひざめの又一杯で呑み明し
精進に上戸何だか物足らず

同行 同 同 同 叫骨 輝翠 右平 松雨 柳骨 一聲

しよんほり息子夜中と歸つて來
眞夜中の夢大阪で宵に見る
靴の音きいて夜警の靜なり
色町の夜中から直ぐ夜が明ける
本宅の潜りがしまる午前二時
眞夜中に宵の喧嘩が折れ合
淋しさを誘ふ夜中の足の音
鐵橋の音が夜中の耳へつき

夜中 高橋古城山選
伯洲 路郎 助六 薰石 二柳子 松雨 路郎 芦穗 輝翠

酔さめの水で女房の愚痴を聞
梯子酒知らぬ人まで吞ます
ト戸まの名のみで洒落もない男
醉さ出る潜りで脊を叩かれる
立膝で艶な姿も上戸なり
まだ唄聲に上戸は酔ふてゐず
五六人ト戸相手にして笑ひ
賑しく笑ふト戸が隣の合ひ
泣上戸ついであのこと口走り
(人)葬式に上戸淋と酔を居り
(地)呑まぬ道頓堀も寒う見
(天)まくま上戸は道を狭く抜け

零骨 二柳子 古城山 子行 同 輝翠 同 芦穗 同 助六 路郎 伯洲

私設 無線電話



川柳塔

太田徹底郎

○ 散髪をしてても目立たぬ若旦那
 お氣に召す柄へ番頭逆らはす
 創造の嬉しさ今日も編み續け
 引越した家も子供のおあつた跡
 勤儉の賜寒く生きるとりけ
 金策がついて障子がよく滑り
 エレベーター何やら夢で見た氣持
 朝六時足袋の小さな音を聞き
 苦しみの家へ近づくと濡れタオル
 日めくりは其日の儘で一七日
 ○ 竹田芦穂

▼うららかさしきりにせにがほしくなり
 の頃になるミ、無線電話も眠けを催して
 来るのかハツキしなくなつて来る。しか
 しこれが一つの仕事であつて見れば仕方
 がない。ほち／＼始めやうかな▼川柳輝
 翠クンが金縁の眼鏡をかけて來たので、
 急に近眼になつた譯でもあるまいといふ
 ので度数の調査にかゝる方に平眼である
 ことが知れた。そこで徹底郎クンに句あ
 り「出來たのか此の頃眼鏡かけてるる」
 「欲しいのか此の眼鏡かけてるる」
 「いほれて此の頃眼鏡かけてるる」
 川柳輝翠たる者返句無てはならないころ
 である▼芦穂クンは何時の間にやら美髪
 を短く刈り込んでる。「出來ぬので此
 の頃刈つてゐる」ではなくて、編輯に
 忙しいので頭髪を分ける暇がないのださ
 うな。色氣はなれての奮闘ぶりには自分
 ながら感心してゐるさうな。▼反對に髪

音もなく春雨庭の木を濡らし
 貯めたのが笑ひの種になる頼死
 四十二すぎで望みすくない子が生れ
 提灯屋淋しい色も干てあり
 庭掃いてからは午前言ふ氣分
 近しく又遠くは見本裏表
 雑作した程母親は旅に居す
 電報にさきでは暮る汽車に乗り
 妾宅の宵寝頻に雨が降り
 口繪見ただけで女中は用になり
 炭ついだから相談にのる氣なり

○ 酒井零骨

運轉手過分な禮さ知られたり
 二階借り下り計の捻を巻き
 落籍されてから蚊をはたき
 立聞きはうつかり足の蚊をはたき
 乳母同志話すは脊の子の批評
 押し賣りに亭主が戻る氣の毒さ
 セメン菓子乳母追つ付いて旗を持ち
 すぐに死ぬ様に書かれた置手紙

をのばして奇麗になつてつけた啞入クンは
 いいのが出来たのではあるまいか細ク
 ンの代りに心配をする同人もあつたが、
 會計も編輯も若手が大車輪でやつて呉れ
 るので、忙中閑を得て頭髪をわけける氣に
 なつたのださうだ。▼風人クンから「こ
 れから川柳を忠實にやります」さいふ通
 知を突然に寄越したので、内々探りを入
 れて見るに、風邪のために唇を荒して
 飯より大きな琵琶が喰られぬためだこ。

新聞もの

伊藤夜及郎

○ 川柳も亦寫生に立脚せざるべからず
 三は予の信する所なり。然るに病床
 に、在る年餘、活世界との接觸は新
 聞紙によるの外なく東京に住んで未
 だ焼跡の慘状を見ず、バラツクの建
 物を知らざる予に生たる川柳の詠出
 は困難なり。以下十五句題して新聞

聲こゑ 變かり 子こ 守まもりの 飽あきた 顔かほ になり
 吊つりの 皮かわの 袖そで口くち持もつ も 女おんな なり
 顔かほの 黻ふく 忘わすれ 藝ぎ者しや柄がらを 選えり
 暮くれて 行いく 様さまな 思おもひ に せめられる
 人ひと込こを 抜ぬけ 重おもた い 子こを 降くだろし
 硯いん箱ばう除ぞけて 這はひ 寄よる 子こを あやし
 満み員いん車しや亭てい主しゆの 方かたへ 子こが 渡わたり
 一い二に枚まい 散ちつて 文ぶん鎮ちん見けん當たうら ず

○ 柳子

宿しゆく引ひの 裾すそ迄いた 寒さむい 風かぜが 吹ふき
 履り歴れき書しよを 持もつ た 一い日にち暮くれ か、り
 新あらた聞き屋や讀よんで 歩ある 終しまひ なり
 入い場ばうに 列れつ組ぐみんで 居ゐる 馬うま鹿からし さ
 座ざ敷しき迄いた 蜜みつ蜂はちが 來きる 花はなを 活いけ
 高たか架か線せん 片かた方かたの 町まち陽やうが あたり
 月つき賦ふ賣うり へ 先ま生せいら しい の が 這は入り
 まだ 悪わるい だ す か 亭てい主しゆが 水みづを 汲くみ

ものこいふは此の次第なり
 野球部は實約濟みで卒業し
 候補者の市部から出るはよく喋り
 大臣の顔ぶれハハア生てたか
 地震説博士きつぱりして呉れず
 メンタルテスト一現こは何ですか
 臺所で唄へば書齋から合せ
 いっこでだれがこ子供承知せず
 溜息へさそひこまれる 長火鉢
 キヤラメルをむぐ手ツ付もきて來
 電車で肩を叩かなくてよかつた話
 豆腐屋は露路へ身輕になつて來る
 地震から 生れかはつて尙わるし
 すつこけの貨車十輛は 大き過ぎ
 銅貨よりしらぬ白痴の名が 高し
 親父から譲られたままそのまんま
 わかりましたので「あのこゝな不届者
 奴が」叱り飛ばしてやりましたは川
 柳王國の話 同い人が飛水クンを訪問
 するこいかに忙がしさうに尻からけま
 でして見せて「川柳よりも仕事が肝心で

黒木 莢 豆

戀人を書す機会のないものか
寫眞機の前に圓滿チト放なれ

太田 一 聲

いのつ見ても職員録の終ひ口
あの前で買った焼芋に持たせ
人前の買った焼芋に持たせ
十七の春に買った土用干
お妾に旦那算盤置かすなり
針子づれ浮名立つのを待つて居る

小泉 飛 水

二階から呼んで豆腐屋迷はせる
盗み見をして居たらしい笑ひやう

宮内 一 洲

平八郎唯一戦に名を残し
イヤノをすする花道へ雪が降り
又元の車掌の人ミなりにけり
大神樂松風近ふ聞こわたり

すから」さいふので「ナル程、尤な話だ
」ミ感心をして歸つて来て、「イヤしま
つた、川柳を作るやうにすゝめについて
肝心の用を忘れて歸つた」▼三月の本社
例會で好成绩をあげた零骨クン此調子こ
の調子と思つたのか歸途祝盃をあげたさ
は罪がない▼落語から川柳、川柳から旅
行、旅行から著音機ミ轉々して趣味のか
はつて行く木念仁クン、最新のレコード
を買入れるこは非常なもので、近く一
〇〇枚突破デーをやるさかやらぬさか
川柳宣傳吹き込のレコード二三枚はあつ
てもよからう▼さう見ても酒豪家の少い
同人中に、路郎センセイに劣らぬ一洲ク
ン曰く、川柳では負けてもこの方では、
ひげは取らぬミ力む▼のむ、かう、うつ
さいふのが三道樂だが川柳家の細クンに
言はせればつくるさいふのを入れるに相
違ない。ほんさにうちの人は、句ばかり
作つてゐて、さうする氣なんだらうさい
ふさころだネ三道樂を知らぬ二柳子クン

難船にしては静かな人ばかり
 大の字に浮いた蛙は平和なり
 弟子を持つ尺八先に首を振り
 骨董屋客をお客と思はせず

○ 武田彩霞

その當座控へ目の飯を食ひ
 折角の良い場高髭邪魔になり
 陽の入り赤い腹した船が着き
 大望をかくす下郎の朝詣り
 寝返りにかけ聲がある患者なり
 審査眼に睨して見ても物足らず
 戎橋今朝は變つた氣で渡り
 蠅割の女張見世のよに並び
 一銭が乞食の頭の邊で跳ね
 義理づくで出た寒行に風邪をひき

○ 岩崎柳路

直接間までピンボンの音が聞こ
 當直へタイムスタンプよく響
 實印ミ聞いて女房は大事がり

にも、このつくる道樂があるが、細ク
 ンにチャーンミ理解があるから大船に乗
 つた氣で川柳のために東奔西走してゐる
 んださうな、川柳雜誌社の庭先へ二柳子
 タンの銅像が立つ日も遠くはなからう▼
 こさいさ、か舊聞に屬するさうなが金熊
 寺吟行の際、一聲クン、豆の葉をしきり
 に千裂つては懐へねぢ込んでゐるので
 「一體誰に持つて歸つてやるのだい」と
 同人の一人が聞いて見たところが、一聲
 クン曰く、「彼の女から頼まれたので」
 ミ濟ましたもの、それから彼の女の詮索
 にかゝつたが、さうしても事件は迷宮に
 入るばかりである。まさかうちのやつに
 頼まれたことも云へないのでせうから其處
 は、い、加減にすることだ。▼第一支部
 の會員硯水クンは過ぐるに目出度いこと
 で歸郷の際、土産に貰つた瓶詰の酢をい
 さゝか持てあまし、「あ、酒になれ酒
 になれ」ミ云つては溜息をついてゐたさ
 うな▼かほるクンは桃割の美しいのを貰

S 型に荷車坂を上つてる

○ 高橋かほる

幕合に巡查けむたい西棧敷

○ 西垣松雨

探し當て互ひに待つたやうに言ひ
ちみやせた事を残して見舞去に

○ 關本雅幽

飛行機で越へて長城なほ哀れ
温なしくすれば意氣地がないと言ひ
葉櫻になつて 鶯本調子
痛さうに霜を踏んでるゴム草履
カーテンをひらき寢臺へ春を見せ
病み上り店へ出て来て邪魔になり
懐爐灰やれく彼岸過ぎました
氣の毒さ唯年頃をほめるだけ

つてからは、日が永くて困るさうです。
そこで考へついたのが百貨店めぐりです
今日は三越、明日は高島屋、お暮しださ
うです。雨に降られたら云つては相合傘
の嬉しさを感じおながが空いたら云つて
は艦船のお二人さんになつて人生の春を
心ゆくばかり味はつてゐるさうです。忙
中閑なき同人嘆じて曰く、「あゝ、たま
らんく」▼古城山クンは電車に便利な
小集に便利な仕事に便利なきころへ移つ
た。すべてが便利すくめである。仕事よ
りも小集に便利なのが殊に嬉しいらしい
▼川柳雑誌社の前の柳の樹が日に日に青
く長くなつて行くのを眺めた同人の一人
曰く、肥料がよくきくからなアミ、註に
曰く川柳雑誌社を訪ふほどの人は必ずこ
のあたりの煉瓦塀へ筒先を向けるからで
ある。赤煉瓦が鹽をふいてゐるのも面白
いではないか▼だんく、話が下へ下つて
来たからこの邊で通話も打切つておく。

(太陽の子)

○ 二の腕をうつかり出した太鼓持
 妹が嫁し付いてから友が減
 葱を切る涙で嫁の無事なこ
 女房が持つ金槌は音ばかり
 兄弟の一人が来ない枕許
 灰皿を一杯にして友は去に
 バラソルの姿は後妻も見ぬす
 抽斗をだまつて開けた御立腹
 髪を結ふ横で話して邪魔がられ
 化粧する後に立つて叱られる

吉川 啞人

○ 四拾五入幹事は少し損成り
 子の機嫌いゝ時ばかり亭主抱き
 薬禮を濟ましてほつこして戻り
 カレンダーむかつかく様に剥取られ
 ゴム草履寫眞器提した男也
 新妻を連れて心齋橋も好し

各地支部新設

本社は川柳の社會化を實現させるため
 全國各府縣に支部を新設いたします。柳
 壇のために且つ又『川柳雜誌』のために
 眞面目に支部幹事をひきうけ、極力川柳
 雜誌の擴張運動を援助してやらうといふ
 川柳家は本社宣傳部へ支部新設希望を申
 込んでいたゞきたい。

本社は調査の上、支部新設の諾否を回
 答いたします。

到底繼續して本社の事業を援助する見
 込みのない人は始めより申込みにならぬ
 やう切望します。でなければ相方も徒
 らに手数をかけることに過ぎない結果に
 なりますから。

本社は不眞面目な人達の後援は潔く
 思ひません。それは川柳を更に誤解され
 る惧れがあるからです。

川柳雜誌社
 宣傳部



編 輯 後 記

❖ 順風に帆をあけた「川柳雑誌」は矢繼ぎ早に三號を出すことになつた。此の間同人一同は句會に、編輯に、宣傳に全く息もつけない忙かしさであつた。お蔭で本社は益々發展するのみである。

❖ 北海の健吟家龜井花童子氏が三月十四日に入社した。同時に第十二支部を函館市青柳町五〇番地に置くことになつた。

既に三月二十五日には同地で第一回の支部會を開催して參會者二十名二さいふ盛會振りであつた。(會報次號發表)其

の後の北海道方面の發展は同氏の力に俟つことが多い。

❖ 第十一支部(東京)では岩崎柳路氏が東京横濱間を極力宣傳につとめてゐる。なほ同氏の宣傳を熱心に後援して下さる柳友各位の御厚意を深謝する。

❖ 四月四日遅日莊で川柳稻荷會が正午から夜間へかけて開かれた。主催者は河盛齋村翁、隠し藝續出で大騒ぎ。一同記念撮影。會報次號。

❖ 金熊寺吟行以來病床にあつた西垣松雨氏は稻荷會の日に始めて出席して獨特の妙技をふるひ、同人をアツミゴはせた。

❖ 武田彩霞氏、高橋かほる氏は同日、本社へ初登城した。

❖ 原史風氏は都合により同人を退かされることになつた。

❖ 中川露太樓、山岡剛山、平井光太樓の三氏は本社同人協議の結果、同人名簿から抜く。爾今本社如何等關係なし。

❖ 第十支部は神戸市中山手通二丁目四九に移し、武田彩霞氏が面倒を見ることになつた。

高橋古城山氏は大阪市外中本町中道四〇二吉村方へ移つた。

❖ 關本雅國氏は大阪市西區鶴町四丁目十三號地嵐山方へ移つた。同時に第四支部も同所に移つた譯だ。

❖ 第三支部會員高見柳骨氏は大阪市南區玉屋町二三五番地高見健四郎様方へ轉居前號正誤。

❖ 鶴見せ、乳母は兩手を叩かせる長人右は志方蝶二氏の句であると同氏から通知があつた。

❖ 改作添削欄の句稿が大分集まつたから次號から發表することにした。

❖ 寄贈柳誌

❖ 忍路(函館)大正川柳(東京)羽衣(神戸)大阪(大阪)戀感知識(東京)番傘(大阪)蛇の目(廣島)白頭家(大連)みちのく(青森)あけぼの(平壤)椎の實(神戸)一步(函館)媛柳(東京)青柳(金澤)水原(小樽)新柳(江別)はこやなぎ(大阪)鉾杉(川越)加良怒(東京)千里十里(廣島)川柳芽やなぎ(京城)通(大)やなぎの芽(山形)柔の華(鳥取)卍子木(神戸)

キリンビールの一杯は

人生を愉快にいたします

晩酌に宴會に御愛飲を!!

東區平野町四丁目

明治屋大阪支店

早暮にビールをついだ好い娘
立飲みの荷物ビールに重た過ぎ
拍手の方へキリンビールの栓が飛び
乾杯の主はカップに取りまかれ

一 秋 坊
零 骨
同 同

話しながら愉快に本が見られるのが此店の特長である。主人公藤堂氏は何んな話でも出る人である。政治も論ずれば教養も談じ得る人である。頗る好感を以て人を迎へるから道頼堀邊を御散歩の節は是非立寄つてあげて下さい。商賣にかけては全く掛引のない人です

(路郎生)

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南 五 六 二 番

投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記する(1)。(2)。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」に封筒に朱記する(1)。(2)。

▼締切は厳守されたし。

▼各地會報は清記の(1)。(2)。

▼用紙は半紙又は同型の野紙に限る。

▼投稿其他につき御問合せはすべて返信封入の(1)。(2)。

募 集

六月號課題

四月二十五日締切

(各題二十句以内)

▲別離

坂井久良 岐選

▲二階

吉本寛 汀選

▲辭職

高橋古城山 吉川啞人 共選

七月號課題

五月廿五日締切

(各題二十句以内)

▲橋詰

篠原春 雨選

▲年増

近藤鈴ノ坊選

▲奉公

柳川洲馬 共選 龜井花童子

每號募集

▲近作柳壇(句數無制限) 麻生路郎選

▲各地柳壇(會報)編 輯 局選

▲文章(評論研究吟行漫文)

價 定

一部 參拾錢
六部 壹圓六拾錢(稅郵)
十二部 參圓(共稅郵)

料 告 廣

特等 一頁
普通 一頁
五號 半頁
行 壹拾貳參
貳拾拾
圓圓圓圓

▼御送金は振替口座大阪三一五一四番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てます其の場合には御不在中でも頂けるやうに願ひますが但集金郵便には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に関する御用件は簡入宛にしない事

大正十三年四月十日印刷

大正十三年四月十五日發行

第一卷 第二號
(毎月一回十五日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸二郎
兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地

印刷所 藤本兄弟社
大阪市東區農人町二丁目七番地

發行所 川柳雜誌社

振替口座三一五一四番

賣 店 書 攤
(大阪) 明文堂 エミヤ 波屋 百足屋 田村 公立社
(東京) 東條 (京都) 三宅 (神戸) 米田
(金澤) 字郡宮 (函館) 石塚

川柳雜誌社同人 (いろは順)

主幹 麻生路郎

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 關 | 宮 | 小 | 黑 | 宗 | 竹 | 高 | 太 | 龜 | 橋 | 岩 |
| 本 | 内 | 泉 | 木 | 清 | 田 | 橋 | 田 | 井 | 本 | 崎 |
| 雅 | 一 | 飛 | 莢 | 夜 | 蘆 | か | 一 | 花 | 二 | 柳 |
| 幽 | 洲 | 水 | 豆 | 調 | 穂 | ほ | 聲 | 童 | 柳 | 路 |
| | | | | | | | | 子 | 子 | 石 |
| | 森 | 酒 | 柳 | 黑 | 武 | 高 | 太 | 吉 | 西 | 井 |
| | 田 | 井 | 川 | 田 | 田 | 橋 | 田 | 川 | 垣 | 風 |
| | 輝 | 零 | 洲 | 佳 | 彩 | 古 | 徹 | 啞 | 松 | 人 |
| | 翠 | 骨 | 馬 | 扇 | 霞 | 城 | 底 | 人 | 雨 | |
| | | | | | | 山 | 郎 | | | |

支部所在地

- 第一支部 大阪市四區八條通南小路 幹事 橋本 一柳子
- 第二支部 大阪市外天下茶屋南下ノ森三五〇 幹事 森田 輝翠
- 第三支部 大阪市外濠寺町下五六〇 幹事 酒井 零骨
- 第四支部 大阪市西區鶴町四丁目十三號地嵐山方 幹事 關本 雅幽
- 第五支部 大阪市北區西野田茶園町七九四 幹事 小泉 飛水
- 第六支部 大阪市北區澤上江町二九八 幹事 石井 風人
- 第七支部 大阪市外南濱一八二 幹事 西垣 松雨
- 第八支部 神戸市旭通二丁目八三 幹事 宮内 一洲
- 第九支部 山口縣山口町石原小路 幹事 柳川 洲馬
- 第十支部 神戸市中山手通二丁目九四 幹事 武田 彩霞
- 第十一支部 東京芝區愛宕町一ノ一六大成社内 幹事 岩崎 柳路
- 第十二支部 函館市青柳町五〇 幹事 龜井 花童子

本社幹事 蘆穂(編輯)啞人、古城山(宣傳)二柳子(會計)
一聲(廣告)莢豆(寫真)

春の浦の歌和新



大坂難波より行程二時間

和歌浦バレット投げて見入るごこ

|| 一 秋坊 ||

先生の笛が鳴つてる和歌浦

いける口ちびりくご和歌を賞め

あこがれて行く和歌浦麗さ

草臥れて見てもおんなじ和歌の浦

|| 零 骨 ||

白砂青松の海邊を江り行く

南海電車